

Stereo Sound

特集1=待望のニューモデル導入顛末記

特集2=ミドルクラスADプレーヤー9モデルの魅力

実力伯仲! 最新ハイクラススピーカー タイプ別ライバルモデル徹底比較



2 0 2 3
SUMMER
No. 227

HEGEL P30A/H30A

ヘーゲルのトップレンジに位置するセパレートアンプが久々にリニューアルされ、プリアンプP30Aとステレオでも使えるモノラルパワーアンプのH30Aが誕生した。今回はH30Aをステレオで駆動し、P30Aとの組合せも含めて再生音を検証する。

創業は1997年と比較的新しいのだが、ヘーゲルのハイファイ市場における評価はひじょうに高く、いまやノルウェーを代表するブランドの一つに成長している。技術力の高さのバックボーンとなっているのは創業者で設計陣を率いるベント・ホルターのこだわりにある。半導体物理を専攻してトランジスタの設計に従事した経験をフルに活かし、音楽信号ならではの挙動を詳細に分析することにより、静特性だけでなく動特性の改善に力を入れていることが特に重要だ。そのアプローチが生んだ成果の一つが増幅回路で発生





プリアンプ「P30A」のリア。入力アンバランス3系統、バランス2系統、AVプリアンプ等と接続するバスルー1系統を装備。出力はバランス1系統、アンバランス2系統が用意されている。



パワーアンプ「H30A」の内部。左右に配されたヒートシンクに取り付けられているのが、計56個ものバイポーラトランジスターで構成される出力段。そして、モノラルのBTL接続時に1,100W(8Ω)の出力を誇る(1Ω負荷でも安定動作すると謳われている)。この大出力の回路を支える電源部が筐体内の大部分を占めており、中央に2つ並ぶ巨大な電源トランスの1基あたりの容量は1,000VA、その両脇に配されたコンデンサー群の総容量はなんと計27万μFという値だ。

する音楽信号由来の歪みを検知し、フィードフォワード方式で補正を行なうSound Engine(サウンドエンジン)技術で、同社のアンプには同技術が必ず投入されている。もちろんP30AとH

30Aには最新世代のサウンド・エンジンを採用し、混変調歪みを大幅に抑えることを狙っている。入力段をシングルペアのFETだけで構成するシンプルな回路にも特長があり、トランジスターの高精度なペアマツ

音色の描き分けが精妙かつ繊細。 解像度高く透明度の高い 音場を展開する

—— 山之内 正

チングの徹底も相まって、プリアンプとしてのさらなる性能向上が期待できそうだ。

パワーアンプH30Aはモノラル駆動では1100W(8Ω)で1Ω負荷まで保証するモンスター級の出

力を誇るが、奥行きを深さを除けば筐体はむしろコンパクトと呼べるサイズで、ステレオ駆動ならかなりスピーク効率良好なパワーアンプと言えそうだ(ステレオ再生時の出力は275W×2)。外見はP30A同様素っ気ないほどシンプルだが、フロントパネル上部の傾斜やロゴを小さくして少しだけスタイリッシュに生まれ変っている。

P30Aの再生音は骨格は堅固だが力みがなく、演奏家同士の呼吸のやり取りが伝わる室内楽や、低音と高音のバランスを瞬時にコントロールするピアノの見事なフレージングなど、演奏のレスポンスの良さを忠実に引き出す力がある。混濁が極小で付帯音が乗らないので音色の描き分けは精妙かつ繊細。ここぞというときの弱音のニュアンスもも

らさず伝える。

動的解像度の高さや透明度の高い音場はH30Aの長所でもあり、途方もなく音数が多いバルトックの「オケ・コン」の細部がこままでよくはぐれて浮かび上がるのは珍しい。ジャズのライヴ音源はスネアやハイハットのアタックと切れの良さが際立ち、もたつかずにテンポをリードするベースの動きの良さにも感心させられた。

P30AとH30Aの組合せで聴いたヴォーカルは声のステレオイメージが3次元的に浮かび、ボディ感というよりペトラ・マゴニー本人がそこで歌っているような錯覚に陥る。発音は明瞭そのものだが、エッジを立てるなど余分なことをしないでリアルティをきわめる手法に強い共感を抱いた。

ヘーゲル

P30A (写真上)

¥1,200,000

●入力感度/インピーダンス:2V/18kΩ(アンバランス)、2V/20kΩ(バランス) ●寸法/重量:W430×H96×D300mm/7.2kg

H30A (写真下)

¥2,700,000

●出力:275W+275W(8Ω)、1,100W(BTL接続時、8Ω) ●入力感度/インピーダンス:1.2V/10kΩ(アンバランス)、1.2V/20kΩ(バランス) ●寸法/重量:W430×H240×D575mm/47.4kg ●問合せ先:河内エレクトロニクス(5419)1594